Over the Rainbow

大阪教育大学　国際センター発行　『オーバー・ザ・レインボー』2015年2月発行

vol.16

TOPICS

■留学フェア（タイ、インドネシア）
■第5回国際センターシンポジウム
■留学生後援会奨学金贈呈式
■地域の国際交流団体による交流活動
　ホストファミリープログラム
　門松づくり体験
　留学生講演「異文化の暮らしを学習しよう」
　ぶどう狩り体験
■日本文化研修
　夏季日本文化研修（浮世絵体験）
　秋季日本文化研修（淡路・鳴門方面）
■平成26年度後期修了留学生メッセージ
■留学生コラム
■国際センターの活動
　韓国語・韓国文化体験研修
　アメリカ語学研修
　ランゲージテーブル開講
　留学生後援会入会のお知らせ

巻頭言

大阪教育大学　副学長・副理事　向井 康比己

『壁を乗り越えよう』

写真：平成26年10月　秋季日本文化研修（徳島県）にて

巻頭言

壁を乗り越えよう

大阪教育大学　副学長・副理事　向井 康比己

私の本棚には1つのコンクリート塊が飾ってあります。それはベルリンの壁の一部で、私が米国のカンザス州立大学で研究生活を送っているときに同僚であった、Friebe博士からいただいた物です。彼は当時、西ベルリンにあるベルリン自由大学からアメリカに来ており、一時的に故郷のベルリンに戻っていたとき、1989年11月10日のベルリンの壁崩壊がおこりました。その当日、彼自身がハンマーで壁を砕いて記念に持ち帰った物です。この壁のためにベルリンは西と東に分断されていましたが、壁の崩壊により東西の冷戦構造が緩和されました。

ベルリンの壁はなくなりましたが、依然として私たちの周りには国の壁、民族の壁、言葉の壁など多くの壁が存在し、また新しい壁が作られています。学内でさえ多くの壁が存在します。教員養成課程と教養学科の間の壁、各専攻間の壁、留学生と日本人学生の間の壁など枚挙にいとまがないです。このような壁をなくしたり、できるだけ低くしたりするための仕組みや方策を考え、実行していかなければなりません。例えば日本人学生と留学生が、対等の条件で学べる場を作ることが必要です。将来的には、留学生の日本語能力のレベルアップのためには日本語教育を充実し、あるいはどの専攻にも英語で教える科目を設け、できれば英語による授業だけでも卒業できるプログラムの設置も考えられます。国境を超えて学生たちが交じり合い、高め合う学びの場を実現するためには、外国語支援ルームをなお一層活用し、留学生と日本人学生が混在する国際寮の設置も必要でしょう。

ベルリンの壁と有刺鉄線

一方で、個人に存在する内なる壁も克服しなければなりません。私自身、学生時代は海外に留学することに対して自ら壁を設けており、同じ研究室の人たちが大学院の修士課程在学中あるいは修了時にどんどん海外へ飛び立って行くにもかかわらず、私は腰が引けていました。博士課程在学中に米国のノースダコタ州立大学に留学する機会を得たのですが、その壁を乗り越えさせてくれたのは当時の指導教授でした。もちろん、初めての海外体験でもあり大変不安でしたが、細部にわたる指導と丁寧なアドバイスをいただいたおかげで安心していくことができました。留学時に自分の専門研究以外に生物学や遺伝学の講義・実習の方法も学んだことが、本学で職を得たあと今でも役に立っています。学生が大学で壁を乗り越えたり打ち壊したりするには、一歩前に出ようという彼ら自身のチャレンジ精神が最も必要ですが、教職員の後押しも大切です。そしてそれらに加えて、地域の方々のご支援が必要なことは言うまでもありません。本学教職員の皆様、地域の皆様には、本学の更なるグローバル化に向けて尚一層のご支援、ご協力を賜わりますよう心よりお願い申し上げます。

平成26年度 留学フェア ～タイ・インドネシア～

本学ブース訪問者数

8月29日(金) タイ・チェンマイ会場	28名
8月31日(日) タイ・バンコク	37名
9月21日(日) インドネシア・バンドン	90名

8月にタイのバンコク・チェンマイで行われた日本学生支援機構（JASSO）主催の日本留学フェアに参加しました。JASSO主催の日本留学フェアには毎年参加していますが、タイで行われるフェアへの出展は初めてです。近年、タイをはじめとした東南アジアの国々からの留学生の増加は著しく、今回の留学フェアでも本学ブースに来場した参加者が熱心に説明に耳を傾ける様子が見られました。

また、9月にはインドネシア・バンドン市で行われた「JAPAN OSAKA 留学フェア IN インドネシア」に参加しました。著しい経済成長を続けるインドネシアでは、日本企業の進出も多く、日本留学への需要が高まっています。それを証明するように留学フェアはたくさんの来場者で賑わい、本学のブースにもたくさんの留学希望者が訪れ、教職員の話に熱心に聞き入っていました。

第5回 大阪教育大学国際センターシンポジウム
「教員養成大学における国際化 ―アジアとの学生交流を中心に―」を開催

学長による開会の挨拶

米川氏による基調講演

キム・ヒョンジン氏の講演

ファム・トゥー・フオン氏の講演

国際センター・城地教授の講演

「教員養成大学国際センターシンポジウム」が11月12日（水）に柏原キャンパスで開催され、学生、留学生、教職員ら約140人が参加しました。今回のシンポジウムは、これまでの本学の国際交流を留学生受け入れの観点から振り返り、現在日本の高等教育が直面している課題である「グローバル化」への手がかりを探ろうとするものでした。

まず、独立行政法人日本学生支援機構理事米川英樹氏が基調講演「日本における留学生受け入れ―日本の高等教育における真の国際化を目指して―」の中で、日本の高等教育における「留学（派遣・受け入れ）」の歴史的推移および現状を世界の動きを含めて概観し、加速するグローバル化の中で大学が主導する「留学」の意義を強調されました。

続いて、第一部「ベトナムにおける日本語教育と留学～高まる交流への期待～」では、本学でかつて日本語・日本文化研修生として学んだベトナムからの留学生で、その経験を生かして本国の大学（ハノイ大学とホーチミン市師範大学：両校は本学の交流協定校2014年締結）で要職に就いているお二人Pham Thu Huong（ファム・トゥー・フオン）氏とCao Le Dung Chi（カオ・レ・ユン・チー）氏にパネリストとして、ご自分の経験を踏まえたプレゼンテーションをお願いしました。

第二部「グローバル時代の先駆者たち」では、まず本学でかつて研究留学生として大学院教育学研究科に在学し、現在は北海道教育大学旭川校准教授でいらっしゃる金玹辰（キム・ヒョンジン）氏が、「日本での10年間を振り返って―出発点としての大阪教育大学―」と題して発表されました。続いて、本学国際センター教授の城地茂氏が「日本人のアジア留学―中国で学んだこと―」の中で、本学の協定校でもある北京師範大学大学院への留学経験を話し、特に今後留学を目指す学生に向けて「留学の際の十分な準備の必要性」について強調しました。

最後は講演者およびパネリスト全員によるパネルディスカッションに移り、「グローバル人材」と「留学」をキーワードにし、フロアにいる学生諸君と「グローバル化する世界で有用な人材とはどのようなスキルを備えているか」「留学のもたらす効用とは何か」に関して活発な議論が展開され、時間が足りなくなるほどでした。

カオ・レ・ユン・チー氏の講演

パネルディスカッションの様子

パネルディスカッションで発言する留学生

集合写真

奨学金贈呈式
大阪教育大学留学生後援会

大阪教育大学留学生後援会による2014年度奨学金等贈呈式を12月3日（水）に行い、私費外国人留学生に奨学金を授与しました。

留学生後援会は、留学生への経済的支援、地域との国際交流の促進を目的として、地域の支援団体及び本学教職員等により構成された組織で、平成15年度から毎年、留学生に対し奨学金を授与しています。今年度は、寄付団体名を冠した奨学金4人、留学生後援会7人、大阪柏原ロータリークラブ教育支援金3人の計14人に奨学金を授与しました。

留学生代表として挨拶した大学院1回生のキュウエンリンさん（中国）は「現実の留学生活は想像以上に厳しく、学業とアルバイトの両立に苦労し、疲れに耐えながら留学生活を送ってきました。留学生後援会奨学金によりご支援くださった皆様に心底から感謝しております。このお金を大事に使わせて頂き、学業に専念することはもちろん、様々な活動に積極的に参加していきたいと思います。（要約）」とお礼の言葉を述べました。

留学生後援会では、今後もこの制度の拡充を目指し支援の和を広げて行くことにしています。

地域の国際交流団体による交流活動

グローバル香芝

ホストファミリープログラム

11月8日（土）、いつも本学の留学生のために様々なイベントを企画、開催してくださる「グローバル香芝」の主催で、恒例の「秋季ホストファミリープログラム」が実施されました。この日は渡日したばかりの留学生20名が、希望者多数ゆえの厳しい抽選を勝ち抜き参加しました。そして、誰もが初めて体験する「日本の家庭」との出会いにわくわくしていました。

今回はまず初めに国旗が示されると、その国の留学生が前に進み出て、自己紹介するのに加えて、出身国でもっとも重要な年中行事（お正月やお祭りなど）を紹介しました。留学生たちは思い思いに懸命に自分の国の風習を伝えようとし、ホストファミリーの方々も興味深げに耳を傾けておられました。その後、学生は一人あるいは二人ずつ、それぞれマッチングした家族のお宅へ招待されました。

留学生の間では日本の家庭を実体験できることから人気のあるホストファミリープログラムですが、たとえ言葉や文化は違っても「家庭の温かさ」は世界共通なのだと、日本の家族と過ごした後の留学生の笑顔を見て感じます。

ホストファミリーの皆様、本当にありがとうございました。

シニア自然大学校

門松づくり体験

12月17日（水）、シニア自然大学校の皆様主催により、今年度も恒例の「門松づくり」体験を開催していただきました。

参加した留学生達のために立派な孟宗竹や南天などの材料が用意されました。留学生が悪戦苦闘すること1時間半、日本の鋸は手前に引くときに切れるのですが、世界の鋸の多くは押し出すときに切れるので、最初は戸惑っていた留学生ですが、慣れると上手に孟宗竹を切って行きました。シニア自然大学校の皆様にやさしく手ほどきいただきながら、立派な門松を完成させました。この日参加した留学生は約30名で、門松づくりは七夕の笹飾りとあわせて留学生に大人気の体験プログラムです。

普段は勉学に勤しむ留学生達ですが、こうして束の間のひとときを地域の皆様と交流し、自然に触れ合う素晴らしい機会を満喫していました。シニア自然大学校の皆様、本当にありがとうございました。

柏原市人権推進課

「異文化の暮らしを学習しよう」

柏原市フローラルセンターで毎年2回実施されている講座「異文化の暮らしを学習しよう」では、本学の留学生が講師を担当しています。2014年11月5日（水）には、シンガポール出身の教員研修留学生リー・シャンシャンさんが母国について話しました。

東京23区にほぼ匹敵する広さの国土に約540万人が暮らすシンガポールは、中国系、マレー系、インド系など多くの民族で構成される多民族国家です。リー・シャンシャンさんは、学校で毎年行われているRacial Harmony Day（民族融和の日）という行事を取り上げ、様々なルーツを持つ人々がお互いを尊重し、理解し合えるよう、子どもたちが体験的に学ぶ様子を紹介しました。また、限られた国土を有効に活用するために住宅開発庁によって公共住宅が建設され、持ち家率が90%を超えているという住宅事情のほか、主要産業、食生活、言語や宗教など、写真を交えながら詳しく説明しました。

参加者からは、「名前しか知らなかったシンガポールが身近に感じられた」「多民族社会なのに自治がしっかりしていると感じた」「何年か前に行ったが、また行きたいと思う」などの感想が寄せられました。地域に根ざした国際交流の取り組みとして、今後も継続したいと考えています。

柏原市

ふるさと柏原ぶどう狩りツアー

8月30日（土）、柏原市様主催の「ふるさと柏原ぶどう狩りツアー」に本学留学生をご招待いただき、14名がツアーに参加しました。当日は天気にも恵まれ、降り注ぐ太陽の下、普段なかなか味わうことのできないもぎたてのぶどうの味に留学生一同は大変感動している様子でした。毎年恒例の「ぶどうの皮飛ばし大会」では、最初は恥ずかしがっていた留学生たちも自分の番が来る頃には活き活きとした表情でぶどうの皮飛ばしに挑戦していました。また、柏原市公認のマスコットキャラクター「かしぴょん」とJA大阪中河内のマスコットキャラクター「あぐりん」も登場し、会場は大いに盛り上がりました。参加した留学生は「ぶどうが本当においしくて、市民の方々とも触れ合えて、楽しかった。また機会があれば是非参加したい」と口を揃えていました。ご招待いただいた柏原市様、本当にありがとうございました。

日本文化研修

夏季日本文化研修 浮世絵体験

平成26年夏の日本文化研修では道頓堀界隈に立つ上方浮世絵館を訪れました。18名の学生が参加し、4階建ての館内の浮世絵を1階から順に鑑賞し、最上階まで行くと日本間に通されました。そこで館長さんから上方浮世絵の歴史について説明を受け、大阪の浮世絵は道頓堀を中心とする歌舞伎芝居に出演する役者たちを描いた役者絵が多いことなどを学びました。留学生は昔の道頓堀の写真や歌舞伎役者の浮世絵をしげしげと眺め、浮世絵制作体験の時間では、館長さんや職員さんに教わりながら、初めて版に絵の具を付け、慎重に馬連を押し当て、三色刷りの作業に勤しんでいました。同じ版を使っても、色の濃淡や馬連の押し方に違いがあり、それぞれ個性的な作品ができあがり、大満足の様子でした。

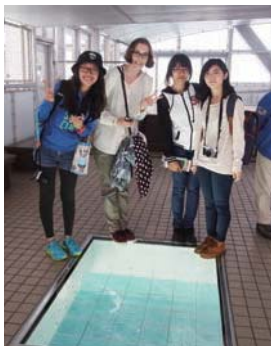
秋季日本文化研修 淡路・鳴門方面

2014年10月25日(土)、恒例の秋季日本文化研修が実施されました。留学生と日本人学生との交流を促進し、日本の地理・歴史や風土、文化を直に体験する機会として開催されている本研修には、毎年多くの学生が参加しています。今回の研修は、留学生54名、日本人学生7名、引率教職員3名が参加し、朝から淡路・鳴門方面に向けて出発しました。道中、世界最長の吊橋である明石海峡大橋を通った際にはその迫力に学生たちから歓声があがりました。

今回の研修は、徳島・鳴門の「渦の道」を見学後、昼食をはさみ遊覧船で渦潮を見学。その後、淡路島に移動してみかん狩りという盛りだくさんの内容です。最初に訪れた「渦の道」は鳴門海峡に架かる大鳴門橋の橋桁内(車道の下)に造られた海上遊歩道です。通路にところどころ設置されたガラス張りの床から見える渦潮は見ごたえ満点で、学生は皆息を呑んで見入っていました。昼食をはさみ、午後からは遊覧船に乗って、渦潮を見学しました。事前講義で渦潮の仕組みや鳴門地方特有の地理などについて学んでいた学生たちは、実際に目の前で現れては消える渦潮を興奮した様子で眺めていました。

その後、淡路島へと移動し、みかん農園でもぎたてのみかんに舌鼓を打ちました。まさにこの時期から旬を迎えるみかんはどれもとても甘く、10個以上をぺろりと平らげた学生もいました。朝から盛りだくさんの行程を終えた学生たちは心地よい疲れと思い思いのお土産を手に、大阪への帰路につきました。

友人との交流を深めながら、日本の文化や風土を直に体験した学生たちはとても充実した1日を送った様子でした。



国際センターの活動

国際センターでは、年間を通して海外の協定校との交流プログラムを実施しています。ここではその一部をご紹介します。

韓国語・韓国文化体験研修

相馬 佳英（ソウマ カエ）
学部2回生
教員養成課程国語教育専攻
小学校コース

今まで数回韓国に行ったことはありましたが、研修という形で行ったのは初めてで韓国にいる間、毎日、すべてのことが新鮮でした。例えば、景福宮等の韓国の歴史的建造物を見に行ったり、韓国の小学校に見学に行ったり、さらには韓国の小学校で授業をしたりと、韓国へ旅行に行くだけでは決して体験できない経験を沢山させていただきました。

また、文化研修では、人との出会いも沢山ありました。行きつけになったパン屋の店員さんや、滞在先のホテルの人と仲良くなることもありました。

そして、何よりも私たちのチューターを務めてくれた2人のソウル教育大の学生をはじめ、様々な場所で出会ったソウル教育大の学生や先生方が、私たちの韓国での生活を助けてくれると共に、楽しませてくれました。私たちが行った時は韓国では学期始まりであり、新学期準備で忙しいにも関わらず、毎日私たちのために、ガイドブックには載っていないような名所や、おいしい食べ物の店に連れて行ってくれ、また、翻訳アプリを駆使しながら、色んな事を一生懸命教えてくれました。また、この研修に参加しなければ出会えなかった同じ大教に通う友達とも出会え、2週間という短い期間ではありましたが、かけがえのない友達になりました。このように充実した時間を過ごすことができ、帰国の日には、みんな大号泣しながらお別れしました。今度はソウル教育大の学生が大教にくるそうで、一緒に研修に行ったメンバーと今から何をしようか考えてワクワクしています。

最後に、研修に関わり、すてきな経験にしてくれたみなさんに感謝します。ありがとうございました。

アメリカ語学研修

吉原 寿樹（ヨシハラ トシキ）
学部2回生
教養学科文化研究専攻
欧米言語文化コース

たった1ヶ月でしたが、アメリカ語学研修ではたくさんのことに驚き、日本にいるだけではなかなか学べないであろうことに出会うことができました。

まず、この研修の核となった現地の大学におけるEnglish as a Second Languageプログラム、つまるところ現地での英語による英語の授業なのですが、授業の中では、他国からの学生らが比較的、積極的に発言していくのを見られたことが衝撃でした。日本の学生は控えめすぎるとよく言われますが、実際に見てみると確かにそのようで、自分を含め、間違うことを恐れてしまう日本人というものを目撃できたのは非常に良い経験になりました。

もう1つの重要なプログラムであった「学校訪問」。地域の小学校を2日間訪れたのですが、1日目、授業を見学していると、算数の授業なのに授業前に子どもたちにやる気を与えるため、先生がギターを弾いて子どもたちと算数に関する歌を歌う場面がありました。どうやら各先生にとって最も効果的な指導が実践できる環境にいるようで、先生も楽しんでいるのが印象的でした。

2日目には観察の他、日本の文化を子どもたちに紹介するミニ授業のようなものも行ったのですが、行った内容のうちの1つである「折り鶴」を教えるのに非常に苦労し、結局時間内に終えることが出来なかったのは忘れられません。自分の英語力の不十分さはもちろんのこと、自国の当たり前を具体的に認識せず、そのまま海外に適用してしまった失敗（この場合は、「これくらい出来るはず。そこまでみんな不器用ではないだろう」と、日本の子どもならあり得る当たり前をアメリカの子どもにそのまま適用してしまったこと）は、非常に悔しい思いをしました。しかし、ますます国際化が加速するであろう今後の教育現場に参加するとき、この経験はきっと力になってくれるだろうと思います。

留学生による無料語学教室「ランゲージテーブル」

国際センターでは、留学生が講師となって母国語を教える無料語学教室「ランゲージテーブル」を毎年前期・後期に開講しています。それぞれ6月から7月、11月から12月までの1ヶ月間、週1回少人数制で行われる本教室は、本学学生だけでなく、教職員も受講可能で、毎回好評を博しています。平成26年度後期には、中国語・韓国語・英語・ポルトガル語・ドイツ語・ギリシャ語の全6言語、7クラスが開講されました。

普段は学ぶ立場の留学生が講師となる本教室は、留学生に講師代が支払われるだけでなく、母国語を教えるということを通して日本語とその言語との違いに改めて気づいたり、言葉を通して自国の文化を知ってもらう機会になったりと留学生にとって貴重な経験となっています。留学生講師のひとり、韓国出身のキム・ソヒョンさんは「ランゲージテーブルで母国語を教えることで、言葉を教えることの意味深さ、大事さを感じた。いつもは無意識に使っている韓国語も、他の学生に教えることは課題だったが、授業を準備し、人に教えることで、韓国語に対する私の態度も変化して、かえって自分の勉強になったと思う。新しい言語を学ぶ大変さを知る留学生として、韓国語に興味を持ってくれた受講生に感謝している。短い期間だったが、自分の国の言葉について他の国の人と話し合う機会になり、すごく楽しかった。今後もランゲージテーブルを通して、色々な国の人に言語の大切さを知ってほしい（要約）」と話しました。

会員募集中 留学生後援会入会のご案内

留学生後援会では奨学金支給、国際交流行事支援などを行っております。ご関心をお持ちの皆様は、ぜひご加入下さい。

会費・納入方法

一般会員 学内職員
・一口1,000円/月、または一括・給与から天引き

特別会員 学外支援者
・振込　任意の金額を下記いずれか宛てにお振込下さい

ゆうちょ銀行
記号：14120　番号：96618321
名義：大阪教育大学留学生後援会
（オオサカキョウイクダイガクリュウガクセイコウエンカイ）

三菱東京UFJ銀行　藤井寺支店
普通預金　口座番号：5210211
名義：大阪教育大学留学生後援会
（オオサカキョウイクダイガクリュウガクセイコウエンカイ）

・現金納入

連絡先　大阪教育大学留学生後援会　森下・稲山　電話：072-978-3351,3300　E-mail：ryugaku@bur.osaka-kyoiku.ac.jp

Over the Rainbow vol.16
年2回発行　第16号　平成27年2月16日（月）発行
編集・発行／大阪教育大学国際センター
〒582-8582 大阪府柏原市旭ヶ丘4丁目698番1
http://osaka-kyoiku.ac.jp/ic/index.html
連絡先／電話：072-978-3300　FAX：072-978-3348
E-mail：isc@cc.osaka-kyoiku.ac.jp